このスポット・おすすめ!

やちむんを愛でながら「旨辛」カレーを味わう

tou（トウ） cafe & gallery

ここでしか見られない作品と人気店直伝のスパイシーカレー

読谷山焼北窯の人気作家・松田米司さんプロデュースのカフェ&ギャラリーが、今年4月にオープンしました。料理の器にその作品が使われているのはもちろんのこと、インテリアには個性的な意匠・造形のやちむんが点々と並んでいます。お店は娘の七恵さん・萌さん姉妹が切り盛りし、スパイスを生かした旨辛カレーとおいしいコーヒーでもてなしてくれます。

「父の米司は、普段の仕事では作家性を決して表に出さず、道具としての"用"をきちんと果たすものを追究している作家です。一方ではその反対に、作家性を存分に生かした作品を集めて、自由に発表できる場所をつくりたいと長年構想を練っており、今年になってようやくその夢が実現しました」。

カフェの看板を背負う自慢のカレーは、長崎の人気店直伝の味。小麦粉を使わず野菜だけでベースを作り、スパイスとヨーグルトなどを加えてじっくり煮込んだ自家製のルーは、「スパイシーだけど徐々に具材の旨味が広がってきます」。またコーヒーは沖縄市にある有名店ヨシモトコーヒーの焙煎豆を使用しています。

居心地も抜群です。松田さんの作風から着想を得てデザインされたという建物は、外観も室内の雰囲気もまるで美術館のよう。8月26日(土)には県内のクリエイターを集めたマルシェ(手作り市)を開催予定です。

住所：読谷村伊良皆 578
電話：098-953-0925
時間：11:00～18:00
休み：日・月曜日
駐車：5 台
http://tou-cafeandgallery.net/

〈おもなメニュー〉
＊チキンとナスのカレー(辛口)…1,200円
　ポークカレー(甘口)……1,200円
　(ナン、サラダ、ピクルス、ドリンク付き)
＊タンドリーチキン　1000 円
　(スープ、サラダ、ピクルス、ドリンク付き)
＊コーヒー(ホット or アイス)……350円
＊自家製ジンジャー ……400円

なぞなぞに 読者 答えて ☺❖プレゼント❖☺

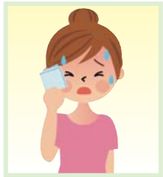
『tou cafe & gallery』で使える

＋

3名様

Q なぞなぞ
行くと、体が温かくなる建物ってどこ？

ヒント
体がほてってくる



7月号当選者　前号の答え〈本〉

おめでとうございます！

★五十嵐 しのぶさん(読谷村在住)
★比嘉 忍さん(読谷村在住)
★比嘉 あけみさん(読谷村在住)

ワイワイ広場

読者プレゼント応募方法

宛先

切手　はがき 904-0303
読谷村字伊良皆237-1
ウインズ
『広報誌係』
①住所 ②氏名
③年齢 ④職業
⑤電話番号

裏

⑥なぞなぞの答え

⑦ご意見・ご感想

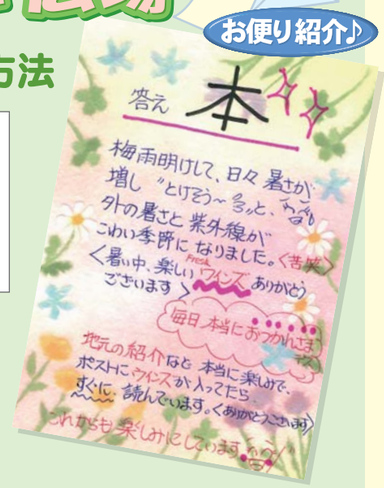
応募者の中から抽選で、読者プレゼントを進呈致します。どしどしご応募下さい！

締め切り

2017年8月20日消印有効

「当選者は次号(Vol.156)にて発表致します」

お便り紹介♪



『Freshウインズ』は、建築でお手伝いをさせて頂いた施主様をはじめ、地域にお住まいの方など、ご縁をいただいた皆様に配布致しております。諸事情により配布不要となった際は大変お手数ですが、その旨ご連絡下さい。(ウインズ広報誌係)

Fresh（フレッシュ） ウインズ

人と人とのつながりを大切に…。池原建設が大切なお客様にお送りする手作り広報誌

Fresh Winds.
2017年 8月号
Vol.155

TOKYO 2020

ハワイ ホノルル市　(提供:慰霊祭実行委員会)

(株)池原建設 企画事業部ウインズ
〒904-0303 沖縄県読谷村字伊良皆 237-1
営業時間 / 9:00～18:00 (年末年始を除く)

住宅のメンテナンスや補修等のご相談は、お気軽にスタッフへお声掛け下さい！

0120-229-512　ウインズ 池原建設　検索

今月の歳時記

8月6日(日)	**第23回 一万人のエイサー踊り隊** 会場・開催地／那覇市・国際通り、パレットくもじ前広場
8月19日(土)・20日(日)	**第35回 与那原大綱曳まつり** 会場・開催地／与那原町・御殿山青少年広場
8月20日(日)	**夏休み企画！ チョークアート体験** 会場・開催地／読谷村・ウインズ
8月27日(日)	**第52回 沖縄青年ふるさとエイサー祭り** 会場・開催地／北谷町・北谷公園陸上競技場

夏真っ盛り。大人たちは暑さに参って、子どもたちは夏休みで、つい忘れてしまいそうな祝日の「山の日」は8月11日金曜日です。今年の旧盆は9月3日から5日。例年は8月に開かれるイベントも、それに合わせて9月にスライドしたものが多く、月末はゆっくりとご先祖様をお迎えする準備を始めましょう。

ストリートストーリー
Street Story!

捕虜としてハワイで収容所生活を体験 平和を願い、県出身者12人の遺骨を捜す

■慰霊祭当日は最初に収容所のあったサンドアイランドを訪問した後、ホノルル市にある慈光園本願寺へ会場を移し、日米それぞれのスタイルで慰霊を行いました。（提供：慰霊祭実行委員会）

比謝川ガス（読谷村大湾）創業者の渡口彦信さん（91）は、戦後、県内でいち早くプロパンガスの普及に取り組んできた先駆者の一人です。ビジネスの傍ら社会貢献活動にも尽力し、警察庁長官警察協力賞（2002年）、藍綬褒章（04年）などを受章しました。

一方で沖縄戦末期に捕虜となり、ハワイで約1年半の収容所生活を強いられた経験から、「生涯をかけたライフワーク」として力を注いできたことがあります。一緒に移送された収容所で命を落とした、県出身者12人の遺骨の帰還事業です。戦後72年たった現在もまだその思いは叶わぬままですが、今年6月には沖縄とハワイの関係者の協力により、初めての慰霊祭がハワイで実現しました。開催に至るまでの長年の経緯と今後の方向性について、渡口さんに詳しく話を聞きました。

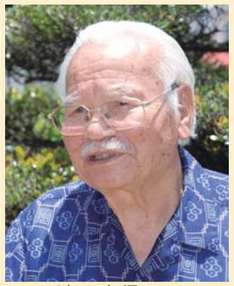
「地獄船」でハワイへ移送 県系人の支援が心の支えに

渡口彦信さんは1926年8月、本部町備瀬の出身です。39年に両親が「渡口万年筆店」を営んでいた嘉手納町へ移り、42年に難関校の県立農林学校（終戦後廃校）へ入学しました。しかし太平洋戦争の戦局の悪化に伴い、「卒業証書を受け取れぬまま」45年3月に高射砲隊へ入隊。同年6月に摩文仁海岸で捕虜となり、最初に屋嘉収容所へ送られた後、3000人余の同胞と一緒にハワイの収容所へ移送されました。

このときの移送船の経験を渡口さんは「地獄船」と呼び、「捕虜は全員、全裸で薄暗い船倉へ押し込められ、片隅にはトイレ用のバケツが2個。むさ苦しさと悪臭が漂う中、一日2度の食事は手で直接受け取って食べました。満杯になったバケツは当番制で処理するのですが、そのとき甲板に出られることが何よりの喜びで、水や米と同じように、空気にもおいしさがあることを心底実感しました」と振り返ります。

終戦はハワイの収容所で迎え、捕虜としてさまざまな雑務・任務に従事。約1年半後にようやく解放され、47年1月に再び故郷・沖縄の地を踏みました。

ところでハワイといえば、19世紀末からたくさんの沖縄県民が海を渡って新たな生活を切り開いてきた移民地の一つです。渡口さんは「厳しい収容所生活の中、県系人がたびたび差し入れを届けてくれたり、帰還時には港へ見送りに来てくれたり、私たち捕虜を物心両面で支えてくれて、生きる望みを与えてくれました」と述べています。



■慰霊祭の前日、かつて遺骨が埋葬されていた墓地の跡地を訪れ、墓標にレイを手向けました（提供：慰霊祭実行委員会）

渡口彦信さん

■行き先も知らされず、不安を抱きつつハワイの収容所へ向け、屋嘉収容所から移送される捕虜（那覇市歴史博物館所蔵）

全員の遺骨が沖縄に帰るまで。遺族の声を聞き責任を痛感

復員後はガス販売業を中心にビジネスの第一線で活躍。一方で戦時中やハワイでの体験が頭を離れることはなく、あるとき、不運にも収容所で命を落とした同胞の遺骨が遺族の元へ返ってこないことを知りました。「故郷へ帰る夢を失った彼らの魂は、今もまだ異国の地をさまよっているのではないか」。そう考えると胸が締め付けられる思いでした。

渡口さんは81年、元捕虜の仲間と一緒に「沖縄PW会」（PW=prisoner of war、捕虜）を結成し、「遺骨を帰還させよう」と36年ぶりにハワイを訪問しました。しかし亡くなった捕虜が埋葬されていたという場所は、その後の開発工事で墓地・墓標の跡形もなく、遺骨は行方不明の状態に。それでも県系人の政治家や弁護士を通じて協力を依頼したところ、遺骨こそ見つからなかったものの、しばらくしてハワイ保健局が発行した死亡診断書が12人分届きました。記載事項をもとに遺族と連絡を取って面会を果たし、死亡年月日や病名、埋葬地などが書かれた診断書を直接手渡して、ひとまず活動は小休止。…のはずが、当時90歳は超えていたであろう、一人の遺族の母親から「遺骨でもいい、息子を抱きしめてやりたい」とすがるように哀願され、「責任をどっしり背負っていることを痛感した」という渡口さんは調査を続ける決意をしました。

その後も国や県に対して繰り返し調査を要請し、自身もたびたび現地へ足を運ぶなど、機会あるごとに関係機関・関係者に働きかけを行ってきました。しかし「私たちのような小さな集まりの力だけでは、なかなか事が進まない。このままでは時間ばかりが過ぎてしまう。せめてハワイで慰霊祭だけでも開けないだろうか」。そう思っていた矢先に、大きな転機が訪れました。

■慰霊祭に出発する前日、渡口さんら実行委員会は県庁で記者会見を実施。一日も早い遺骨の帰還が待たれます（提供：慰霊祭実行委員会）

今年6月にハワイで慰霊祭を開催 引き続き国・県に調査を要請

昨年10月の「第6回世界のウチナーンチュ大会」開催にあたり、ハワイの県人会を束ねるハワイ沖縄連合会の役員が来沖し、嘉手納町で面談する機会を得ました。渡口さんは「亡くなった12人を鎮魂するとともに、収容所時代に恩を受けた県系人に感謝を伝える場を設けたい」と強く要請し、沖縄ハワイ協会の協力もあって、悲願だった慰霊祭を行うことが決定。同月に実行委員会が結成され、沖縄ハワイ協会会長の高山朝光さんと渡口さんが共同代表に就任しました。

慰霊祭は今年6月4日にハワイ・オアフ島で開催されました。沖縄からは渡口さんを含め2人の元捕虜と遺族ら約80人が訪問し、現地からは約120人が参列。式典の前には収容所跡地などゆかりの場所を見学し、夜は懇親会を開いて全員で親睦を深めました。

大任を果たした渡口さんは「沖縄とハワイの間に、一段と太いパイプができたことがうれしいですね」と笑顔を見せ、「今までは個人の力で地道に働きかけをしてきましたが、今回の慰霊祭では県内のマスコミの皆さんをはじめ、本土とハワイのメディアも同行して取材していただき、全世界へ情報を発信してくれました。両国の政府や関係機関の元に、私たちの強く熱いメッセージが届くことを期待しています」と感想を述べました。

今後の活動については「実行委員会の体制をどう引き継いでいくか。今年10月で結成1年を迎えるので、それを機に改めてみんなで議論したい」とのこと。その一方で「引き続き国や県に、遺骨調査の要請をしていく」との意志は依然衰えず、「昨年施行された戦没者遺骨収集推進法では、戦没者の遺骨収集は“国の責務”であると初めて定められ、24年度までに集中的に取り組むことが明記されました。戦後72年がたち、遺族の皆さんの高齢化が進み、私も今年で91歳です。ぜひ12人の遺骨の帰還が早期に実現するよう、積極的に働きかけていきたいと考えています」と話してくれました。

■懇親会の締めくくりは参加者全員でカチャーシー。現地の皆さんと絆を深めました（提供：慰霊祭実行委員会）